

経蔵

この経蔵（経典の収納庫）は当初、1613年に江戸幕府の初代将軍家康（1543-1616）が増上寺に寄贈した経典を収蔵するために建てられました。強力な統治者であった家康は、10年以上を費やし、3版の仏教の聖典（中国の宗王朝（960-1279）版、元王朝（1271-1368）版、朝鮮の高麗王朝（918-1392）版）を構成する18,309巻の経典を収集しました。経蔵は1802年に現在の場所に移され、度々江戸を襲った火事から経典を守るため、厚い土壁を漆喰で塗装する土蔵造りで建て直されました。

経典は、輪蔵と呼ばれる高さ約6メートル、直径約6メートルの大きな八角形の棚に収蔵されていました。棚の真ん中にある軸を中心に回転する輪蔵の様式は、13世紀半ばに中国から日本に伝えられました。参拝者はそれぞれの角にある柄で棚を回転させます。輪蔵を時計回りに一回転させることは、その棚に納められている経典をすべて唱えることと同等とされています。識字率が低かった時代、文字が読めない信者は輪蔵によって経典を読むことの恩恵を象徴的に享受できたのでした。破損を防ぐため、現在では輪蔵を回すことはできません。国の重要文化財である3版の経典は、より安全な場所に移されています。

経蔵の入り口には、息子2人を左右に従えた傅大士（497-569）の像が置かれています。傅大士は輪蔵を発明したとされる中国の在家信者です。